一般社団法人スウェーデン社会研究所
所報　№371 号
2015 年 12 月 1 日発行

目次

第 179 回「ソフトサイドからのスウェーデン――ルーベンズ・バーン人形」
清水照子
第 180 回「スウェーデンの至福の園から学ぶ――市民農園と福祉」
廻谷義治　日本市民農園連合会長、NPO 法人千葉県市民農園協会理事長、千草台園芸サークル会長
第 181 回「スウェーデンのケアの概念としてのオムソーリ」
藤原瑠美　福祉勉強会ホスピタティ☆プラネット代表、博士（医療福祉ジャーナリズム学）

第 179 回「ソフトサイドからのスウェーデン――ルーベンズ・バーン人形」
清水照子

私は、スウェーデンとも、人形作りとも縁のない人生を 40 年過ごしてきました。その私が、スウェーデンの国のこと、人形づくりのことを、ここで話すことは、思いがけない事なのですが、また、その思いがけなく人形作りを通じて得た、私の知識や経験を中心に、スウェーデンのことを中心に話してみたいと思います。まず、人形の名前は、ルーベンズ・バーン。バーンと言うのは、「子供たち」と言う意味で、ルーベンズの子供たちと言う意味です。それから、ソフトサイドからのスウェーデンと言うのは、スウェーデンに関する学術的知識人がなさる講演などがハードサイドと言うなら、私のような普通の人間、たいして知識もない、私の目線から見たスウェーデン。それと、私の人形で、一番大切にしていることは、柔らかいこと。この二つをかけてソフトサイドのスウェーデンとしました。

今日、私がお話しする順番は、スウェーデンの日本人としての私の基礎の部分、ルーベンズの誕生とその特徴、ルーベンズが育ったスウェーデンの育児環境。ルーベンズの人形は、0 歳から 100 歳までの人形、その 100 歳側の認知症、高齢者の為の人形です。今新しく進めているプロジェクトで人形と音楽のコラボレーションをお話しします。

私の父は、戦争中、飛行機の教官でした。父が生き残ったので、私が、生まれたわけです。私は、京都の街の真ん中、2 人姉妹の二女として生まれ、京都の伝統の真ん中で育ちま

した。親戚が清水の窯元、実家も室町で、頭の上げ下げなどをうるさく言われ、花嫁修業的な学校で、アパレルデザインを学び、1 年間、大阪の大手繊維会社に勤め、チーフデザイナーのアシスタントとして色んな事をしました。

23 歳の時、ニュージーランドに 1 年間行かないかと言う話が来た。行く先の市の市長がスポンサーで、当時、就職した勤務先の会社から、帰って来たら海外部で働いてもらうから、行って来なさいと言われ、両親も納得して、ニュージランドに行きました。

南島のニンデンに行き、1 年の約束が 17 年間いました。ニュージランドは、人間一人に対し羊 30 頭以上いる国。のんびりしていて、ストレスが全然なく、その当時、ニュージランドは、ちょうど、英連邦から独立した時で、何処かに経済パートナーを見つけなくちゃいけない。そこで、経済成長が真っ最中の日本に白羽の矢が当たり、私の様に何も知らない、経験のない若い女の子に大きなチャンスが与えられたのです。

仕事の内容は、ダニーデン市が、小樽市と姉妹都市になり、姉妹都市提携委員会の市役所の嘱託職員として働きました。その中の一つ、小樽に行くと、市役所から運転手付きの送迎がつけられ、セレブまがいの経験をさせて貰ったりしました。姉妹都市は、親善交流だけではなく経済交流もあり、私が、いろいろな事を頼まれることになり、トレーディングカンパニーまで作ることになました。

ニュージランドからは、石鹸、シープスキン。日本からは、建築材料、ハードなものは、トラックの中古ディーゼルエンジンまで輸入する会社になった。あれよあれよという間に、ニュージランドと日本を行き来し、会社が大きくなったのです。

プライベートでは、３歳年上の開業歯科医と結婚し、子供を３人授かりました。そのまま、終わるかと思ったら、子供３人を引き連れ、スウェーデンに来ました。西海岸のイエテボリから車で５分の近く。ヒンドスという人口 2,500 人くらいの村。

来た時には、びっくりしました。スウェーデンというのは、規則がいっぱいあり、その規則をみんなが守る。なんでも証明書が要り、書類が要るという紙の国。日本は、紙の国と規則を守り、伝統としきたりがあるということでは似ているが、私は、17 年間ニュージランドでものんびり暮らし、そこから、急にスウェーデンに来て、これで、やって行けるのかと真剣に思いました。

スウェーデンは、伝統があり、古い国で、戸籍を作った一番最初の国。昔からパーソナルナンバー、個人番号がある。例えば、駐車違反をしてその紙を破って捨てると、捨てるなんてとんでもないこととして最終的に裁判所に行き、パーソナルナンバーでブラックリストに載る。何から何まで、がんじがらめで、きちっとしている国。それが、普通の日常生活でも同様です

ニュージランドは、「シュド・ビィ・オーライ」、“なんでもいいよ”と言う国だった。
スウェーデンは、例えば、お呼ばれに花束を買って持って行く。花屋さんで紙を巻いてプロテクトして貰う。花束を持って「こんにちは」、と入っていく。相手が戸を開けて、いらっしゃいと言うと同時に、紙を取らないとダメ。取ってしまったらダメ。小さい事だが、

何から何まで、そんな感じ。
　それと、もう一つ、驚いたことは、全然、昼間、人がいない。いるとすれば、年寄りばかり。私は、子供 3 人連れだし、何処かで、ママ友でも出来、お茶でも出来るかと思って行ったが、とんでもない。
　私の住んだヒンドスは、昔の別荘地。古い歴史があり、湖の畔がきれいな所。ヒンドスの特徴は、色々あるが、自分のひいおじいさんが、ここで遊んでいたようなところでその孫がそのままに遊んでいるような、日本では、昔話の様な所が、まだある。それと、スポーツが盛ん。子供のテニス、カヌー、体操など、お兄ちゃん、お姉ちゃんが、順繰りに子供たちが、小さい子に教えているというような穏やかな所。
　私が、一番感じたことは、私と、同じくらいの年齢の女性が、朝、ごみ捨て場にごみを出しているのを見て、この人は、毎日毎日、こんな風にごみを出し、これからも同じ繰り返しなのだろう、と思い、私は、南の果てから北の果てまで行って、親類も古い友達もいない。そんな身の上だったので、とても、この女性が羨ましいと思った。
それと、ヒンドスやスウェーデンの良いなと思うのは、若い人が、外に出て、子供や家族が出来るとまた戻ってくる。その人たちとまた、仲良くする。子供が、戻ってくる所。そういうこともいいなと思った。
　6か月くらいしてから、スウェーデンの2人の女の人から、私の経験がとても面白いから、一緒に会社をやらないかと誘われた。それが、ジャフコと言う会社でスウェーデンと日本のコミュニケーションをつかさどる。メインの業務は、情報提供・セミナー・現地事務所、そういう事をいろいろやっていました。
　この 2 人は、とても頭が良く行動力があって、その年のイヨテボリ市で毎年、新しいユニークで、将来性のある会社を選ぶと言うロビンソークルーソー賞に選ばれ、急にメディアからも注目された。
　そのころ、1995 年に国際陸上大会が、イヨテボリで開催された。ストックホルムではなく、イヨテボリで開催されたことが、とても大きなこと。ストックホルムとイヨテボリは、張り合っている。いがみ合うというよりは、どちらかと言うと、東京都、大阪の様な関係。
　その国際陸上大会の時、二人が駆け回って、西海岸の大きな企業、エリクソンとかに掛け合って、スポンサーにして、片面英語、片面日本語の「ウエルカム　ツウ　イヨテボリ」と言う本を出した。その中で書いたものを日本語に訳し、私自身も外国人として、スウェーデンのことが変わっているなと思う事を書いて、スウェーデン語に訳しました。
　私が変わっていると思ったのは、食の伝統。日本では、旬のものを旬に食べるのが伝統。スウェーデンは、そうじゃなくて、いつに何を食べるのかが伝統。そして、一番は、酢漬けニシンとシナップスと言うとても強いお酒、これを必ず祭日とか決まりの時に絶対に食べる。それも、食べ方があって、酢漬けニシンとポテトをフォークにさし、シナップスを注ぎ、シナップスソングを歌ってから、スコールと乾杯して飲み、同時に食べる。そうすると、味が混じっておいしくなる。スコールをした時には、互いに目、アイコンタクトす

る。とても恥ずかしい。だから、酢漬けを食べたければ、絶対、歌を歌わなければいけない。シナップスも飲まなければいけない。豆のスープとパンケーキは、必ず木曜日に食べ、白ワイン、エビを大体、金曜日の夜に食べる。金曜日に魚屋さんの前に人がずらっと並んでいる。そういう食の伝統を面白おかしく、書いてきました。

ちょうど、その頃、知り合いを通じて、エヴァ・ヤ・スコープと言うアーティストと出会いました。彼女は、トムティ二ステイ、クリスマスの夜に欠かせない、普段は、森の奥に住んでいる小人、トムテを作っている専属デザイナー。スウェーデンでは、クリスマスイブにトムテがカンテラを提げて午前４時ころ来る。その前にミルクが無くなり、お父さんが買いに行く。トムテは、詩のようなものを書いてプレゼントのヒントをくれる。トムテが配り終わった後にお父さんが帰ってくる。というのがストーリー。

彼女は、クリスマスの１カ月前、家中にトムテの飾りつけをする。彼女が作る子供、動物はすごくユーモアがあって、素朴で心温まるような可愛らしさがあり、私は大好きになった。こんな素朴な可愛いお人形にして、子供が遊べるようなものを作りたいと思い、２人で作ろうじゃないかという事になり、週末になると彼女のアトリエで作り始めた。

平面の物からシルエットを立体の物に作るのは、簡単ではない。元気な子供のイメージを平面で繋ぎ合わせて作るのは、とても大変な事だった。ちょっと、カーブが違っても、自然の形にはならないし、すごく、難しい。私は、ちょっと、アパレルデザインの下地があったので、ああでもない、こうでもないと言いながら、作っていた。ちょっと、ぎょっとされる方もいるかもしれませんが、出来上がったものが、これ。抱きしめるとギュっとなって、私たちとしては、すごく可愛かった。

その頃、ヤスコを通じて、須永さんにお世話になり、日本で紹介したらどうと言われた。須永さん(編集部注・前スウェーデン社会研究所代表理事)から大手の会社にアポイントを取ってもらって、東京に人形を連れてきた。その頃の人形は、化石化したしたおもちゃと言う感じで、日本は、バブルの真っ最中で、デジタルのゲームや洗練されたプラスチックおもちゃが主流。全然相手にされなかった。

ところが、ちょっとしたドラマがあり、縫いぐるみ関係のある大手会社に行き、製作者の夢や、意気込みを話して帰ったところ、その夜、社長から電話があり、「これは、絶対に売れないけど、自分もおもちゃを作る者の一人として、子供にそういう物をあげたいという夢としてやろうじゃないか」と言われ、その会社の社長のわがままという事で作られたが、出来上がったものは、全然、雰囲気もイメージも違っていた。それで、これを子供たちにあげたいと思ったら、自分達で、作るしかないと思った。

製作工場は、私たちは経験がなく、色々と探したが、応対が誠実だった中国の工場に決めた。そこの社長は、見た目はしとやかで、エレガントだが、肝っ玉が据わっていて、すごく人情がある人。この人形の最初のきっかけが須永さんで、須永さんがゴッドファーザー、その工場にめぐりあえたのが第二の幸運。

2000 年から 2015 年まで、中国に毎年行っていたので、中国の変わりようを見てきた。

2000 年の広州は、自動車は、タクシーだけで、個人の乗用車は、1 台も見当たらなかった。中国の工場でも、手作りをどのようにして教えるとかいう事は本当に大変。型で出来た物なら教えられるが、これは、手作りなので、フィーリングが、すごく大事。どういう風にフィーリングを教えるのが大変。作ったものをスウェーデンに送ってきても、全部、やり直しが必要という事が何回もあった。その度に工場との信頼関係があったので、エヴァと二人でやり直しをしたりした。

その頃に出来上がったのが 3 点。アンナ、ミンミなど。その頃の取引先のデストリビューターで、障がい者向けに売っている会社があり、自閉症、障がい者にも抱きしめる、顔が人間らしく、とてもいいと言われ、その会社がドイツに卸している会社が最初の年に 5,000 体を買ってくれた。それに気を良くして、メイアック、ハリアなどのエスニックドール 3 体が 1 万体売れた。

次の年に、国際ドイツのおもちゃショーに行くとドイツの人形展でコピーが出回っていた。びっくりして、ショックで弁護士に頼んで訴えた。解決するのに 5 年かかったが勝訴。コピーと言っても、アイデアと形は同じ。商品番号、服も同じで素人の人が見てもわからない。名前もヒダがヒナ、エミルがエミール。訴えた時点で、在庫にあった 5000 体全部引き取ってくれと言われ、引き取った。村にあるぼろぼろの空き建物があったので、そこに入れた。この子供たちをどうしようと言い、真心を込めて作ってもらったので捨てることもできない。この人形には、販売会社の縫い取りがあるので、絶対に人にあげるのも、ほかすのもダメと言われた。それで、毎日、毎日、目打ちで、5000 体全部、タグを外し、いろんな人にあげたりしていた。

その時、スウェーデンの友達にいっぱい助けられた。スウェーデンの友達は、困った時にこそ、助けてくれる。一旦、友達になると、親身になって助けてくれる。病院のお医者さんの友達は、自分の部屋に飾って、患者さんにコメントしてくれ、車でいっぱい、納入したこともあった。その年、イヨテボリで、クリスマスマーケットがあって出店し、3 週間くらい、会社社長とか、アーティストとかお医者さんとか、友達が順番で店番をしてくれ

た。その時の反応がとてもよくて、次の年、たまたま、ドイツの国際おもちゃショーのブースに空きがあり、小さなブースを出した。それ以来、ストックホルムで年 2 回、ドイツで年１回、展示会にずっと出し続けている。その時、会社をボロ屋からヒンドスの駅の方に移し、初めて会社らしい形でやり始めた。

エヴァは、純粋のアーティストで、現実的な事は全く何もできない人。私は、外国人で、電話恐怖症のくらい下手なスウェーデン語で、情報を集めたり、エクセル、運送会社の知識、梱包材の手配、経理のプログラム、コンピューターのエクセル、デジタル画像とかを勉強した。何かを学んでいることが楽しくて、成長する。その充実感が楽しかった。そして、人形は、じわじわ売れていった。

人形が増えてじわじわ売れていったその理由。抱きしめる人形。人形は、人間の最後のおもちゃ。人形を抱きしめるたり、世話をすることで感情を癒される。自分の手で遊ぶ、生活を学ぶ。人形と言っても、バービー人形やリカちゃんは、早く大人になりたい。早く、大人の格好がしたいというもの。そうじゃなくて、子供の時代は少し、大人にあこがれずにいてほしい。子供は、子供らしく、想像力を育てる、この時代を大切にしてほしい心が伝わって、じわじわ広がって行ったと思う。例えば、遊びの中から創造性を作っていく、そういう子供たちにあげる人形がいいと思った。感情を癒したり、自分の手で遊んだり、人形の世話やお話をしたり、自分で遊びの中から創造性を作っていく人形がいいと思った。

人形の特徴は、第一が、顔。お友達感覚が出来る。この顔は、ほっぺた、おでこの出具合、あごの感じを見ながら詰めていき、糸の引き具合で完成してくる。目は特別に別に作る。目の付け位置が少し、違っても、顔が違ってくる。現実により近づけるよう、頬っぺた、おでこの出具合、あごの感じ、全部見ながらつけてある。１体、１体違う。

次に大事なのは、アイコンタクト、目と目を合わせることは親密になる。お母さんが、赤ちゃんを産んで、赤ちゃんを見つめると、愛情が湧き、オキシトシンという愛情ホルモンが分泌され、湧いてくる。それを、うちの人形でも子供たちが、目で、自分の友達と感じて貰えるというのが特徴。目と目が合って、慰められる。

三番目のユニークな点。男の子も人形遊びが出来る。赤ちゃんが生まれた時に、男の子には、車や怪獣、女の子には人形とママゴトを与える。スウェーデンの心理学者によると、男の子が車を選ぶと、親が潜在意識の中で肯定し、それが、子供の選択に反映すると言っています。

スウェーデンは、男女同権。父母の家事は、全く同じ。家ではお父さんも子供をお風呂に入れたり、おしめを取り替えたり、炊事、洗濯をする。男の子が人形のおむつを替えるのは、普通の事。男の子の人形の売れる割合は、三分の一位とすごく多い。女の子に男の子の人形と言うのも半分くらい。私の思うのは、女の子より男の子の方がデリケート。男の子の方が、感情を癒されて、抱きしめて親密感を持つ事が大事。金属とかプラスチックのおもちゃだけだと、愛情はく脱になると言う先生もいる。柔らかい物で遊ばせてあげる。

日本は、今でも、男の子は、泣いちゃいけない。男の子は、強くなくちゃいけないとい

う育て方をされがち。男の子の感情を出させるのを大事にするのが、スウェーデン。「悲しいようね。悲しければ、泣いてもいいんだよ」と言ってあげるのが大事。優しい男の子に育てたいと思う親は、人形を与えると私は、信じている。

私たちは、10 年間の間に、13 シリーズ、人形のモデルにして 80 体作った。その中で、スウェーデンに関係ある二つの事を話します。

リンデン、分類学の創始者。スウェーデン人が、誇りにしている分類学の父と呼ばれている人。2007 年に、300 年の生誕祭だったので、リンデンにちなみ、スウェーデンの森の中にある小さな生き物という物を作った。その時、スウェーデンでは、森に行く時、バスケットを持っていくので、バスケットの箱に入れた人形を出しました。

森は、スウェーデン人にとって心の故郷。とても大切なもの。ユニークなのは、森は誰の所有であっても、キノコ採り、木の実採りなど、自由に入って散策して楽しめる。それがスウェーデンの素晴らしいところ。小さい時から、森で、やってはいけないこと、木を折ってはいけない。騒いではいけない、ごみは捨てない事などを教えられて巣立ってきている

それともう一つ、ルーベンズは、子供の体、実際、リアリスティクに赤ちゃんの形で作っていて、首も座っていない。お尻の穴まである。この人形は、大人は、裸の男の子、女の子の人形をアラッという反応をするが、子供にとって、自然な体にすごく興味がある。そういう事をタブーにする必要はない。そういうことも共感を得て、ヨーロッパ中に売れています。

グーディーズですが、赤ちゃんが生まれた時、白と黒しか見えない。形もはっきりした事だけしかわからない。赤ちゃんには、大人の考えでは、ソフトな色の物をあげがちだが、赤ちゃんには、目のぱっちりした、はっきりした色の物をあげるべきだと考えました。

この名前は、グーティズ。英語で、バラ菓子と言う意味。スウェーデンでは、半世紀位歴史があるバラ菓子。どこのスーパーマーケットでもある。シャベルで、いろんな味のものを好きに掬い、ナイロンの袋にぐちゃぐちゃに入れ、子供たちはとても好き。海外に行っているスウェーデンの子供は、お土産に何がいいか聞かれると、グーディーズと答える話をよく聞きます。

2015 年、デーリーを一新し、「デーリーコンセプト」を出しました。それは、小さい妹、弟が出来た時、「これが、あなたの赤ちゃんよ」とお母さんと一緒にお世話をしてあげるというイメージ。それが、今年のスウェーデンのおもちゃ大賞にノミネートされた 3 社の 1 つに入った。受賞はしなかったが、これだけスウェーデンで浸透したことがうれしかった。(編集部:講演の中でのパーポイント説明)

どうしてこの人形が受け入れられているか。数字を見ながらお話しします。

スウェーデンの国の面積、日本より 20%ほど大きい。人口 13 倍、人口密度 15 倍、平均寿命は大体同じくらい。生活満足度は平均 6.6 倍、日本は 5.9 倍と平均より少ない。スウェーデンは、平均より高い。人口の減少率を見ると、日本は減っているが、スウェーデンは

増えている。出生率は人口 1000 人に対し、日本は 8 人に対し、スウェーデンは 12 人。2013 年の女性 1 人当たりの子供の数は日本 1.4 人、スウェーデンは、世界で 2 番目に多い。15 歳から 64 歳までのパーセンテージは日本とスウェーデンは、殆んど同じ、ところが子供の数を見ると、日本は 19%で、6%の差がある。老人の方は、23%対 17%で 6%の差がある。

スウェーデンは、子供が多く、子供の出生率が高い。政府が子供が増える政策にフォーカスしている。おもちゃも品質が高い。子供のために良い物を推奨し、赤ちゃん用品も良い物が出て、おもちゃ産業も活発。じゃ、どうして、そんなにたくさん子供が産めるのか。絶対に理由がある訳なんですね。今からお見せするのが、日本とスウェーデンの比較金額を円換算して比較してみました。

●子供にかかる費用

子供にかかる基本的教育費は、殆んど同じ。かかるのは学費。日本では、公立幼稚園から高校まで一人につき、850 万円、私立幼稚園から私系理科系大学で 4500 万円。よっぽど、リッチじゃない限り、子供はたくさん産めない。そういう理由だと思う。

スウェーデンはゼロ。大学に行っている最中も、学生ローンセドリンがもらえる。最高額 10 万円くらい。それは、生活費。学生ローンの半額は、返さなくていい。後の半額は、就職して、1 年後くらいから給料の２パーセントか３パーセントくらいとか返していく。返済額が変わる。私の娘も、留学している。下の娘は、同志社大学に留学したが、交換留学費はただ。それプラス、留学の旅費は、学生ローンから他に出る。私は、子供にお金をかけていない。これは、スウェーデンの一番素晴らしいとこだと思う。本人が勉強したければ、親の経済力に関係なく自分の力で、いくらでも勉強できること。ローンも自分の力で返していける。本当に平等です。

●児童手当

年収 320 万円以上になっている。一人頭にこれだけ。6 人子供がいれば、毎月 15 万円もらえる。子供を保護している政策。日本と比較して感じる 2 番目が育児休暇。日本は、出産前 6 週間、出産後 8 週間。スウェーデンは、育児休暇が 360 日ある。5 日働いていると考えて、360 日。週で 72 週間、それプラス父親にも 60 日育児休暇がある。父親が全部とれば合計 480 日の 96 週間。年収の最高で年収 600 万。それ以上あっても、年収の 80 パーセント貰える。これが、8 歳まで続けられる。８歳まで続けられるという事は、例えば、子供が 1 歳までは、母親は、家にいます。１歳まで使ったとして 52 週間ですよね。残り、40 週間くらいをどのように使うかは、どの様に働くかは、各家庭が考える。

例えば、1 歳になったら、保育園に預ける。週の 3 日働こう。週の半分働こうとなると、休みがもっと、増えるわけなんですよね。3 歳くらいまで、普通でも 2 歳くらいまで、そのままでずっと、行ける。例えば、私は、ずっと、仕事をしたい、両方とも、キャリアだから。でも保育園は預けるのが長くてかわいそうだから、私たちは、1 時間、2 時間早く迎え

に行くわとなると、それこそ、永遠に取れるという感じになる。だから、それで、8 歳までとなっているわけなのです。保育園に行っても、早く迎えに来るお父さん、お母さんは、確かに多いです。

それと、看護休暇。年間 80 日取る権利がある。会社は、給料を払わないが、国が給料の 80%払う。病気だと 2 週間取れ、会社が払う。スウェーデンは、本当に、子供にやさしい国。父親が育児休暇を取る。1974 年には、父親の育児休暇を取っているのは、0.5%だったが、今は、90%。30 年間でスウェーデンは、メンタリティがものすごく変わった。父親自身が、子供を育てることがすごく大切だという事を認識し、社会全体がポジティブに認めている。この国のどんな偉い人、博士や弁護士であろうが、育児休暇を取っている。育児全体として、480 日として、スウェーデンの父親は、25%が育児休暇を取っている。日本の父親が育児休暇を取っているのは、1.9%。父親が育児休暇を取っていると、母親も仕事を続けられるので、キャリアアップ出来る。長い目で見ると、母親の収入が７%上がる。

スウェーデンでは、街に出ると、育休の父親が集まっていて、パパ友の風景が日常茶飯事。かっこいいお父さんが子供連れで散歩している姿も多い。その風景をツーリストが写真に撮ったり、私の娘の英国人の友人が、ゲイが多いと間違えるほど。

母親の職業への復帰率、スウェーデンでは、３歳以下では、30%。３歳以上 72%、5 歳以上になると 81 パーセントの人が働いている。日本は、それに比べると半分。男女の格差のない国ですから、男性が働いているのは平均 76%。女性が 72%。

●子供のいる女性が働ける理由。それは保育園

保育園は１歳から５歳まで、84%入園の資格があり、申し込みから３か月以内に入園の保証がある。日本では、保育園や託児所に入れるのが大変と聞きましたが、うちの孫は、スウェーデンに帰ってきて、申し込みから 1 カ月で入れました。費用は、給料年収最高 680 万円まで、子供 1 人につき 3%。無収入、失業者、経済的に余裕のない人達も、1 カ月に 15 時間から 20 時間保育所に行く権利がある。例えば、子供が３人いたら、１人くらいしか、３%払う人はいない年収の 5%くらいで収まる。３人目だと多くて 3%、４人目だと、ただになる。

私の孫も、最初の 1 週間は、親が付いていくスクーリングがあり、私も 1 日付いて行った。遊び場も施設の中も広い。こんな北国なのに、真冬でも外でのお遊びが基本でそればかりさせる。雨模様の時は、雨合羽。冬は、スキーウエアの様なジャンプスーツの様な物、中は、ティシャツ。いくら汚してもかまわず、遊びと言う遊びは、外で行ない、おやつも屋外にある屋根のある外で取る。何から何まで、外で遊ぶ。昼もごちそう。ごはんの後も、後片付けも自分でさせる。家では、後片付けもしない子が、先生の声掛けで、マジックの様に自分で出来る。先生は、子供に対する話し方ではなく、普通に話す。それはすごく良いと思う。

幼稚園のお昼は、ほとんどエコロジー食品。子供には、無農薬の物を食べさせるのが方

針。エコロジーとは、野菜、果物に始まって、卵、乳製品、肉、ワインまで、肥料が無農薬という事だけではなく、鶏、牛など動物が、外で動き、歩いている。そういう物がエコロジー商品。15 から 20%値段が高いが、スーパーマーケットで毎年毎年、売り場のシェアが増えている。エコロジーへの関心が高いので、来年は、無農薬のオーガニーコットン 100%のルーベンズの人形を作る予定。

●スウェーデンの高齢者の現状

スウェーデンの 65 歳以上人口は 170 万人、認知症患者 16 万人、80 歳以上の人口 49 万人。私の知っている限り、２家族一緒に住んでいる家は、一つもなく、みんな、子供の家族と一緒に住んでいるところは、全然なくて、自分達、夫婦でも、一人でも暮らしている。みんなしっかりしていて元気。女性は、65 歳くらいまで女性だって、72%のみんな働いていて、退職金、年金もあるし、人生を謳歌している訳なんです。色んなクラブに入り、ぴんぴんしている。80 歳くらいまで、みんな元気な人が多いんじゃないかという気がします。

80 歳くらいになると、ホームヘルパーを受けている人が多い。ホームヘルパーを受けている人は 24%。特別養護施設に入っている人 15%。全体的に見てみますと、デイセンター、これは、60%、ショートステイと言うのは、病院です。

●施設に入っている人、食事の配送、アラーム設置はこんな割合

ホームヘルパー、介護ヘルパーペーの違いは、私は、分からないが、スウェーデンでは、ホームヘルパーと言います。スウェーデンでも、在宅ケアが多い。日本では、家族と一緒に住んでいると、ヘルパーは、掃除、買い物は、ダメだというんですが、スウェーデンでは、そういう事は、全くなくて、全く一人で住んでいるお年寄り、本当に体が動けない人は、朝来てもらって起こしてもらい、シャワーを浴びたり、お昼食べたり、夜食べて、寝させてもらうとか、ホームヘルパーは、1 日に何回も来ないとだめですよね。それが、ちゃんとある。月にホームヘルパー56 時間以上、病院にかかった場合も含めて、1 カ月最高は 3 万円弱かかる。そういう意味では、すごい安心ですね。ＧＮＰの割合で、介護にかかるパーセンテージがスウェーデンは高いそうです。

ハリタコミューンは、イヨテボリの隣、人口は少ないが、認知症高齢者対策をすごく考えている所。日本からの視察も多い自治体。

ここで、掲げていることは、高齢者の割合が急激に増加している。認知症は、現代社会で一番困難かつコストがかかる病気である。そして、高齢者のかかる病気の中で、一番治療のリソースがかかる病気です。認知症患者への投薬を少なく出来る何か他の治療法があるだろうか。不投薬。そして、認知症患者の生活の質の向上に貢献できる何かあるだろうかということを考えていたんですね。

グンナー・ヒョーセル教授、カロリンスカ医学研究所の方なんですが、この人が、「認知症及び精神障がい者へのカルチャー治療」ということを 1990 年代から言われていて、医学

の先生が、カルチャー治療という事で、異端視されていたんですが、最近は、論文も出されて、有名になられている方。この先生が言われるのは、「音楽は、認知症高齢者の動揺を抑えるのに、役立つ。そして攻撃的態度を和らげるのに影響がある。そして、音楽は、薬物療法ではない」という事は、つまり、音楽の特別療養施設への導入を考えるべきだ。そのように言われているわけです。但し、それぞれの個人の年齢と背景に適応した音楽が大事である。どんな音楽を流してもいいという事じゃないんですね。

それとは、別に、人形療法と言うのは、昔から言われているわけです。例えば、自閉症の子たちや認知症の人たちに役立つ。それが、ルーベンズを使うが一番最初に、始まった訳なんですが、どんな人形であれ、とりあえず、人形が良い。でも、私たちは、抱きしめられる柔らかい人間感覚がある人形が一番だと思っている訳なんです。

ハリタコミューンと私たちル―ベンズが一緒になって、認知症、高齢者のための人形と音楽療法というプロジェクトを始めました。これは、コントロールクリニックスタディと言って、普通、医学の関係ばっかりだったのですが、コントロールと言う所が大切なんですけど、それを人形ですると言う、今まで無かった画期的な事。今、始まったばかりで、20 体くらい。人形に中に、スピーカーが入っている。ふたつのスピーカーをプルーツースを通して音楽を流す。スマートフォンで音楽を流せる。

●研究課題は、その人に合った音楽をどの様に流すか

今、国家大学の学生たちに、プロジェクトとしてどうしたらいいか、研究してもらって

始まったばかりです。私の母も認知症で、昔、越路吹雪のサントワマミーや、尾崎紀世彦のまたあう日までなどが好きだったので、入れて聞かせたが、症状が進んでいて、反応が乏しかった。長いプレーリストを、認知症になったお父さんやお母さんのために、子供がいい音楽を探して作ってあげれば、一番いいプレゼントになると思う。

小さい子もまた、音楽が好き。将来、例えば、誰でもスマートフォンを使える。そうすると録音する機能は、簡単。例えば、母親が寝る時にお話しストーリーを録音して子供にあげる。そうすると、子供は、お母さんの声を聴きながら眠る。あるいは、お話しストーリーを入れてあげる。子供は、おとなしく聞いている。そのような可能性が新しく、出てきた。お年寄りの癒しになる事が出来るのは、とても、素晴らしいこと。今まで、しんどいことをスウェーデンでやってきて良かったと思います。

第 180 回「スウェーデンの至福の園から学ぶ――市民農園と福祉」

廻谷義治　日本市民農園連合会長、NPO 法人千葉県市民農園協会理事長、千草台園芸サークル会長

市民農園は、1700 年代にイギリスで誕生。ドイツがその概念を固め、フランスが国際組織を作ったと言われている。市民農園国際連盟組織ができたのは 1926 年。初代議長にはフランス人の Father AAbbé LEMIRE が就いた。また、市民農園は誕生の経過から福祉と深い関係があり、様々な機能を加え、役割を果たしながら普及していった。日本では、1924 年にイギリスから導入されて広がり始めたが、第２次世界大戦により減少し、1949 年には消滅した。今日に続く日本の市民農園は、イギリスでの誕生から約 200 年遅れて 1970 年前後に生まれた。農地法という、農地の所有、売買、賃貸を原則として農家に限定する法律が存在したため、市民農園の開設・運営は手探りで行われ、様々な面でヨーロッパに遅れていた。

それから 20 年、日本の市民農園活動に大きな動きが出始めた。1989 年には、市民農園全国組織「日本クラインガルテン研究会」が誕生。この動きの中で、市民農園についてもヨーロッパに学ぶ動きが進み、1993 年に東京と岡山で「市民農園国際シンポジウム」が開かれた。メイン講師は、スウェーデンの Mr.Sören Cronsioe およびドイツからの２名であった。これを契機に、ドイツおよびスウェーデンと日本の距離は近くなった。なお、私たちの目からは、市民農園と福祉の関係はスウェーデンの取り組みが進んでいると思われ、スウェーデンに多くを学んだ。

私のスウェーデンとの最初の出会いは、高校時代にクラブ活動で植物図鑑の検索から、Carolus Linnaeus を知ったことである。スウェーデンの方と知り合いになったのは、先述のクロンショー氏が最初である。国際シンポジュウム終了後に、彼はストックホルムの市民農園へと誘ってくれた。1996 年８月上旬に、クロンショー氏を頼り、ストックホルムを初めて訪問。

彼はまず、Danderyd Hospital（ダンデリド病院）における農具改良やレイズドベッド方式の農園区間などのハンデをカバーする園芸の取り組みを見せてくれた後、1905 年開設の SÖDERBRUNN からリゾートコロニーの Allotment Granby まで４つのタイプの市民農園を案内してくれた。さらには、有機栽培農場、リンネ博物館、スウェーデン農業大学等も見せてくれた。最後には、アンナ・リンダハーゲンの胸像の前で私たちの素晴らしい研修旅行を締めくくってくれた。

体系的な見学と多くの資料提供で、私はスウェーデンの市民農園について基本的な姿を

把握することができた。この後、２回目を 2003 年、第３回目を 2007 年、第４回目を 2011 年といずれも８月に訪問し、SÖDERBRUNN、SÖDRA ÅRSTALUNDEN、SKARPNACK の３つの市民農園（Koloni Trädgård）を見学し、Mr.Tamiko Bjernér（ビヤネール多美子さん）、Mrs.Atsuko K Sandberg（サンドベリー敦子さん）に大変お世話になりながら、各市民農園およびその周辺情報を得てきた。

様々なタイプの市民農園を回る

Allotment Skarpnäck

ストックホルム最大の市民農園で534の区画がある。1936年に開設された。

エリックとソーレンのクロンショー親子

父親エリックはこの地域の環境と市民農園を守った。ソーレンは国際組織の会長になった。

様々なタイプの市民農園を回る

(引き続き、スカルプナック市民農園)

環境問題には非常に気を使っており、トイレはブロックごとの共同である。

Allotment Granby　Resort Colony

グランビーは、ストックホルムの南隣りのまちHuddingeに設けられた、滞在してよい、小屋の大きな市民農園である。88区画ある。

フランソン会長の案内でスカルプナックへ

今回の訪問は、クロンショーさんおよびエイボールさんとの再会と、
前年にイギリスの国際会議でお会いしたフランソン会長への表敬訪問であった。

花いっぱいのマリーさんのガーデン

スカルプナック市民農園のクラブハウス

ソーデルブルンの市民農園

クラブハウスは森のはずれにひっそりと建てられ、シンプルである。

室内は機能的に整えられ、外見より広く感じられる。反対側の壁には年表も貼られていた。

タントの民農園

タントは4つの市民農園280区画が集まっているところである。
この時期のスウェーデン市民農園協会長オスカーソンの区画もここにある。隣接して中層の集合住宅があるが、以前は市民農園の場所であった。また、スウェーデン協会のミスター・トリンは、ここの
市民農園を借りていたが、待望の戸建て住宅を取得した途端に、市民農園区画を返上しなければならなかったということである。このあたりはきちんとしている。

私は、Office International du Coin de Terre et des Jardins Famliaux（市民農園国際連盟）に加盟している 14 の国々を訪れ、それぞれの国の市民農園を見てきた。そこには、共通してコミュニティとファミリーが存在し、都市の緑を担い、子育てと高齢者の生きがいと生活を支えあう福祉の姿がみられた。「ヨーロッパでは、市民農園には豊かな人間愛（philanthropy）がある」と聞かされてきたが、Stockholm の４回の訪問で、最初に基本的なことを十分に教えていただき、以降、４つの市民農園を少しずつ異なった情報を加えながら見せていただく中で、この言葉を肌で感じたように思った。

およそ 300 ヘーホーメートルの allotment garden（Koloni trädgård）を利用する地域の人々を、各地の人々を、そして各国の人々を繋げていく市民農園活動が、至福の生活を広げ、人々の平和を確かなものへとしていくことを学んだ。

また、講演のまとめ「スウェーデンの市民農園から学んだこと」では、スウェーデンやデンマークは、世界一幸せな国として紹介された事があり、福祉の進んだ国である。市民農園の関係でも、福祉との関係は、スウェーデンに学んできた。私は約 20 年前に最初の訪問を行い、15 年の間に４回訪問してきたが、総体的には、モニカ・アンダーソンの言葉に凝縮しているように思われる。「市民農園は、首都（→都市）の環境にとって重要であり、都市を温かく友好的な所にしている。それらは社会と個々の市民の双方に、価値がある」。また、“それは市民があってほしいと願う場所にあり”、コミュニティをつくり、豊かな環境を守り、子育て空間を確保し、熟年の人々が元気に活き活きと過ごす空間となっている。ビヤネール・多美子さんのお義母さんは、天国に旅たつ近くまで、市民農園を一人で借りて通っておられたということである。（スウェーデンの小さな庭から）。各農園は、開設の経緯や立地などから、異なった姿をつくりながら、各々の歩みを大切にし、発展を続けて

いる。

そして、「日本の現状、どう進むべきか」については、①ヨーロッパが 200 年の歴史を持つのに対して、日本はまだ 50 年に満たない②ヨーロッパが市の土地を使うのに対し、日本は農家の土地（私有地）を使う③農水省が公表する統計では、法律に基づいて開設したものに限定されるが、これらの市民農園は利用期間が原則 5 年未満になる。統計に載らない市民農園の方が数は大きい④利用者の組織化がその中の人材を活用できない
⑤農園の連携が出来ず、ノウハウや情報の共有ができない――としている。

ではどう進むべきかについては、①本場ヨーロッパの、市民農園に対する基本的な、あるいは共通的な認識を普及させる②市民農園利用者の組織化を進める③市民農園のネットワーク化を進める④市民農園の立地性などを生かした多様な形態等の市民農園を進める
⑤的確な助言・指導を出来る人材の要成、信用保証を担える体制・組織作りに取り組む
⑥子育て支援、高齢者の生きがい空間、国籍の異なる人々の相互理解促進空間として推進する――としている。

（編集部注：本稿は廻谷さんが作成した要約に、編集部が補足を加えたものです。）

第 181 回「スウェーデンのケアの概念としてのオムソーリ」

藤原瑠美　福祉勉強会ホスピタティ☆プラネット代表、博士（医療福祉ジャーナリズム学）

背景

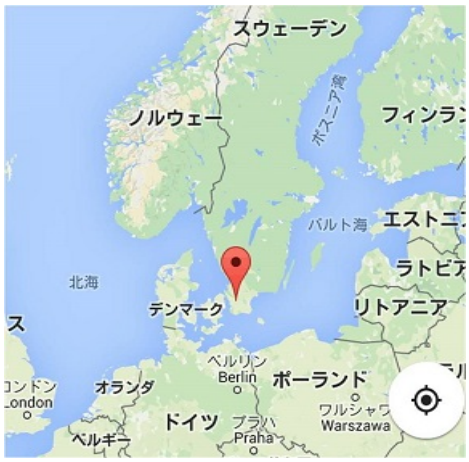
日本は、20 年後に未曾有に認知症の人が増える時代を迎えます。1947-49 年生まれの団塊世代が 85 歳を迎え、85 歳を過ぎると認知症の発症率が一気に高まるからです。認知症発症の最大のリスクは加齢。

65 歳以上に占める発症率は、75 歳―79 歳で 6%だったのが、85 歳-89 歳では 25%と高まります（Socialstyrelsen2007）。

その対応として、超高齢社会は医療から暮らし支援への転換が社会政策、もしくは健康政策として重要であることを、私はスウェーデンから学びました。

定点観測

スウェーデンには 20 のランスティングと呼ばれる広域自治体（県）と、290 のコミューン（基礎自治体/市）があります。地方分権が進む県と市の役割分担は明確で、県が医療サービスを担当し、県の歳出の 9 割が医療関連経費です。市は福祉サービス、教育サービス（保育園から高校教育、社会人教育、移民のための語学教育）、及び生活サービスを担います。所得の平均 30%が地方税で、そのうち、平均 10%が県税、20%が市税です。国税を払うのは国民の 2 割です。国税は老齢年金や子ども手当などで家計に再分配されるほか、歳入の少ない県と市に一般補助金として再分配されます。



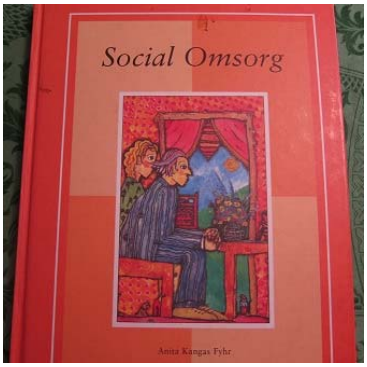
【スウェーデンの学生寮】

2005 年 4 月から 7 年間にわたり通算 260 日、スウェーデンの人口３万人の基礎自治体エスロブ市の定点観測をして、それを 2 冊の本にまとめました。エスロブ市は、横浜市（人口 375 万人）とほぼ同じ面積に、人口 3 万人が住んでいます。エスロブ市の高齢者ケアの主役は、医師でもなく、看護師でもなく、基礎的な医療の勉強を修めた 400 人の介護スタッフ、アンダーナースでした。そして、エスロブ市の認知症の人々の症状が進まないのは、オムソーリのケアが関係しています。

スウェーデンの認知症ケアの歴史的考察

北辺の最貧国だったスウェーデンは、19 世紀半ばから移民の歴史が始まります。そのため、若者が減り、高齢化が早くから始まりました。高齢化（65 歳以上の人口が 7%）が始まったのは 1890 年です。82 年の歳月をかけて、1972 年、世界でもいち早く高齢社会（同 14%）に突入しました。

50 年代、60 年代を通じて、大量の老人ホームが建てられ、同時に虚弱な高齢者の終の棲家として、60 年代から 70 年代にかけて大量の長期療養病棟が整備されていきました。また、認知症の人々は精神病院の認知症ケア病棟に収容されます。同時に、ナポレオン戦争以来戦争をしなかったため、スウェーデンは第 2 次世界大戦が終わると、瓦礫の山と化した欧州各国の復興需要で好景気が続きました。こうした中で、1959 年の病院法では、病院医療の充実と領域拡大が図られます。もはや慢性期疾患は、病院医療の中で位置づけられるべきであり、福祉の領域で扱われるべきでないと謳われていったのです。しかし、これらは多床室であったために、生活空間がベッドとなり、廃用症候群となる高齢者が増えていきました。



【介護学校の教科書。omsorg の文字がタイトルに】

70 年代はスウェーデンの高齢者医療福祉の大きな転換期です。1973 年、未来研究審議会が発足します。同審議会の社会福祉プロジェクトチームは、スウェーデンに古くから伝わる大切な言葉「オムソーリ（分かち合う」に着目、オムソーリの社会化の研究が始まります。1978 年 同審議会は社会における福祉“Omsorgen i samhället” を発表しました。福祉政策は単独ではなく、労働市場政策、家族政策などを通じて一貫性のある事業をするべきであるとしました。

【福祉施設トロールホガーデン。右上は個室のキチネット、左下はトイレ。】

一方、70 年代に入ると、障害者施設が解体していきます。70 年代末になると、精神病院にいた認知症の人々が病院を出て、地域に戻り始めます。1977 年、世界初のグループホーム「ロービュヘメット」がストックホルム郊外に誕生、認知症の人々が、こじんまりした、家庭的な環境に住み、できるだけ自立した生活を送ることで、認知症の進行を遅らせることが実現されています。

1979 年になると、スウェーデン医療福祉合理化研究所（Spri)の手で、「ロカ―ラ・シュクヘムの指針」が出版され、長期療養病床による廃用症候群にストップがかかります。

社会サービス法にオムソーリという言葉が初登場

1982 年、上記の流れを汲んで、枠組み法と言われる社会サービス法（SoL）が制定されます。その第 5 条にソーシャルオムソーリ（Social Omsorg）という言葉が初めて登場しました。それまでは、ソーシャル・ヴォード（Social Vård）という言葉が使われていました。ヴォード（Vård）という言葉はケアと英訳されていますが、看護、保健という意味があり、医療的なニュアンスがあります。そして「病気の回復をめざす」という意味が含まれています。オムソーリという言葉もケアと英訳されることがありますが、「介護」とか「気遣い」という意味があり、「病気の現状を維持するか、または悪化する」という意味があります。

社会サービス法は、社会生活全般に及ぶもので、第 1 条には「社会サービスは、民主主義と連帯の精神に基づき、人間の経済力と社会的安心感の向上、生活条件の平等化と積極的な社会参加を促進するものである」と書かれています。以降、現在までも改定されながら、

スウェーデン社会の質を作り上げてきました。同法を主体的に担うのは290のコミューン（市 基礎自治体）です。1983年には、保健医療サービス法（HsL）が施行されます。私が滞在したエスロブ市で現在も働く、現場スタッフは、社会サービス法の制定により、高齢者福祉現場が大きく変わったと証言しています。

エーデル改革は、高齢者の暮らしを医療から福祉（暮らし支援）に転換

1992年1月に施行されたエーデル改革は、高齢社会の対応を医療中心から福祉中心に転換した大改革です。社会サービス法の施行から10年の歳月が過ぎています。

また、エーデル改革は、虚弱な高齢者の社会的入院を無くす大英断をした改革でもあります。急性期の病院や精神病院のベッドを占領していた虚弱な高齢者が地域に戻ってきましたが、受け入れたのが療養型の病院や施設だったのです。多床室で一部屋に2床、または4床のベッドがあり、生活空間がベッドであったために、寝たきりの高齢者が生まれ、廃用症候群が大きな社会問題になっていきました。

そこで、エーデル委員会が主導した一つは、ランスティング（県）が経営する病院や医療施設で退院が決まった高齢者が、退院後のコミューン（市）の受け入れ体制を整えられていないばかりに、社会的入院を続ける場合は、コミューン（市）はランスティング（県）に対し、「社会的入院支払い責任」として入院料を払うということが義務付けられたのです。

二つ目は、コミューン（市）がこれまでの多床室の施設を、国の助成金を得て「特別な住居」に建て替えていくように義務付けられました。特別な住居は、住宅法に適ったアパートで、使わなくてもキッチンとシャワールームがついており、エスロブ市に7つある特別の住居は90年代（1994年、1996年、1998年、2000年に2つ）に建てられました。ただし1985年に1つ、残り一つは不明です。おりしも1992年は、スウェーデン経済が初めて、3年続けてマイナス成長をした時期で、経済的に厳しい時期でした。こうした困難な時期に、建て替えが続けられたことは、スウェーデンの真骨頂を垣間見る気がします。

三つ目にエーデル改革が果たしたことは、職員の大移動でもあります。

エーデル改革は、コミューン（市）が経営する福祉サービスに医療の一部を融合させた改革です。そのため、ランスティング（県）が経営する医療機関で職員として働いていた、看護師、アンダーナース、理学療法士、作業療法士がコミューン（市）の職員に大量に異動したのです。ただし、医師（一般医、専門医）は県の職員として留まりました。医師も一般医（一般医療専門医）と専門医に分けられ、一般医はプライマリケアを担い、総合医、家庭医として地区診療所に働きます。専門医は病院や専門医療機関で働きます。エーデル改革後に、プライマリケアを行う一般医が保健思想を普及する役割を担うようになりました。また、コミューン（市）における医療のトップは看護師です。各コミューンには医療責任看護師(MAS)がいて、コミューン(市)がおこなう医療行為の全責任を担います。MAS[は、国（保健福祉庁）の連絡窓口でもあります。

エーデル改革から 15 年後のエスロブ市

私がフィールドワークをしたエスロブ市の高齢者福祉の現場は、1992 年のエーデル改革から約 15 年を経たコミューン（市）の姿です。私は 2009 年に『ニルスの国の高齢者ケア エーデル改革から 15 年目のスウェーデン』を、2013 年に『ニルスの国の認知症ケア 医療から暮らしに転換したスウェーデン』をそれぞれ上梓しました。ともに、エーデル改革を経て、高齢社会は医療から暮らしに軸足が転換したことを書いた本です。

認知症ケアにかかる国の経費については、驚くべき数字があります。医療（診断・専門外来・薬）にかかる経費は 5%。残り 85% がケア（特別な住居・ホームヘルプ・デイサービス・リハビリ）という分担なのです（出典：保健福祉庁 socialstyrelsen(2007) Demenssjukodommarnas amhällskostnader och anta)。

また、一般医は、私の取材に対して、「認知症の診断には 6 カ月を要するが、診断が終わるとケアの人たちに患者さんをバトンタッチする」「年に一度はフォローアップの診察をするように認知症のガイドラインに書かれている」と語りました。認知症の人に対して重要なのは薬ではなく、接し方である。いかに接するかが悪化を防ぐと語りました。これは、市の職員においても、看護師から管理職、アンダーナースまですべてのスタッフに徹底されている考えでした。

また、認知症の人たちの状態をみると、エスロブ市の 65 歳以上のケアサービスを利用している利用者は、6 割が普通の住居（自宅）に住みホームヘルプを利用している人で、残り 4 割が特別な住居に住む人です。高齢者の要望には強い在宅志向があります。スウェーデンでは今や二世帯住居はほとんどなく、伴侶が亡くなった場合は、あたりまえのように一人暮らしに移行します。ただし、親子の仲は親密で、毎週末には一緒に過ごすというケースがよく見かけました。職住接近であるからできることかもしれません。しかも、65 歳以上で、ホームヘルプを利用している人の利用時間は大変短く、いちばん短い一月に計 1 時間から 9 時間の利用が、エスロブ市の場合は 44%もいます。

終末期にベッドで過ごす人はいますが、長患いをせず、いわゆる廃用症候群と思われる寝たきりの人がいないのです。

衝撃的な発言もありました。ある特別な住居のベテランアンダーナースは、今まで痰の吸引を経験しておらず、「今度、痰の吸引が必要な入居者が出て、今、看護師から特訓を受けている」と筆者に語りました。特別な住居で働くアンダーナースや看護師に「痰の吸引が必要なケースはあるか」とことあるごとに質問をしてきましたが、現在、経験している人はいませんでした。「日本は寝たきりにしているから痰の吸引が必要になるのでないの」という答えが多かったです。

エスロブ市の認知症の重症化をみると、基礎数字が少ないのですが、表 1 のように軽度と中度を合わせて 95%になります。重度の人は 5%しかいません。介護保険でおおよその比較をしてみると、重度は要介護３～５に該当します。エスロブ市では認知症の人の 56%が一人暮らしをできるのは、軽度の状態を保っていられるのです。国全体の独居率は 45%。いず

れも認知症が悪化していないことを物語っています。

表１エスロブ市でホームヘルプを受ける認知症の人々の状態

認知症のレベル	独居（人）	独居でない（人）	合計（人）(%)
軽度	22	12	34（39%）
中度	27	22	49（56%）
重度	0	5	5（ 5%）
合計	49（56%）	39（44%）	88（100%）

出典：認知症専門看護師 エヴァ-ブリット・ミントンによるアセスメント

表２ スウェーデンでホームヘルプを受ける認知症の人の状態

認知症のレベル	独居（人）	独居でない（人）	合計（人）(%)
軽度	25,000	25,000	50,000（39%）
中度	9,500	11,500	21,000（55%）
重度	500	6,500	7,000（ 9%）
合計	49（56%）	39（44%）	78,000（100%）

出典：Socialstyrelsen(2007) Demenssjukdomarnas samhällskostnader och antalet dementa i Sverige 2005

オムソーリ（Omsorg)のケアの誕生

エスロブ市では、かつて高齢者ケアは「社会サービス部」が担当していました。2003年、エスロブ市議会は、当時の社会サース部を現在のように「家族と子ども」と「看護と介護部」に分けました。「看護と介護部」という呼称は、Vård och Omsorgというスウェーデン語表記の意訳です。言葉の意味を後述します。「看護と介護部」は915人が働く組織で、高齢者と障害者のケアを担当する部署です。

高齢者ケアの組織には看護師、アンダーナース、理学療法士、作業療法士、管理職、事務職が働いています。ホームヘルプサービス（訪問介護）においては、家事援助を柱としていました。しかし、ホームパトロールという、掃除と洗濯だけをするアンダーナースで構成された専門チームをつくり、料理は真空パックの調理食の宅配を民間委託で行うように切り替えました。そして、ホームヘルプの仕事をオムソーリのケアに特化しました。それまでのホームヘルプでは、掃除、洗濯、調理に多くの時間を使い、利用者と会話する時間が足りなかったという反省があったからです。組織替えにより、利用者中心のオムソーリのケアが実現しました。訪問時間が短くなったことで、より多くの利用者の訪問も可能になりました。ケアが入ることで、認知症の症状の悪化を防げたのです。

スウェーデンの80年代のホームヘルプが描かれた、外山義著『クリッパンの老人たち』（ドメス出版）には下記のような記述があります。

ホームヘルプを受けている老人の大多数は、わずかに数項目の家事援助的サービスのみを受けている人によって占められており、一日何回も対人介護的ケアを要するような人は1割から2割にしかすぎない。すなわち、大半の老人は、本当に週に数度のサポートを受けるだけで、自立生活が可能になる人々であり、逆にそのような人ひとが、僅かな在宅プログラムの不在のために施設ケアに移されてしまうとするならば、老人自身の生活の質にとっても、社会のマクロ経済的な視点からみても、大きな損失と言わなければならない。

オムソーリのケアは、外山先生が「わずかな在宅プログラムプログラム」と書かれたことに該当するように思えてなりません。エスロブ市が経営する高校教育では3年間の一般課程と合わせて職業教育が行われています。また、成人学校では成人向けの介護コースがあります。カリキュラムは、介護の現職であるか否かにより異なります。非介護職はスウェーデンで教育を受けた人は1年。外国人は1年半のカリキュラムが組まれます。介護の現職の人がアンダーナースになる場合は、教師が個人面談をして、どれだけ介護に修得しているかにより、カリキュラムが個別に組まれます。

オムソーリの概念

ストックホルム大学のマルタ・セベヘリ教授は、民営化における高齢者ケアの質の研究者です。セベヘリ教授は、オムソーリという言葉は「いたむ」(sörja) という語に類似しており、「～を援助する、面倒をみる」(sörjaför)、「～に同情する、～に気がつく」(sörja med) という意味があると書いています。さらに、介護という実働の側面と感情的な側面の二面性を持つと書かれています。(斉藤弥生 2014-2 / Szebehely 1996.22 Werness1983:18)。

興味深いのはオムソーリには「入念、几帳面」(noggrannhet)、「心遣い、配慮」(omtanke)、「大切にする」(aktsamhet) という意味があるということです。セベヘリ教授はオムソーリを 3 つの意味に整理しています。つまり、オムソーリとは、

- 感情を持つ人間によって営まれる、入念な (noggrannhet)、心遣いのある (omtanke) 実際の働きである。
- 混在する関係者間の関係性が問われる概念である。
- 働きとともに質が問われる概念である。(斉藤弥生　2014 /Szebehely 1996.22　文献 23)

つまり、オムソーリには下記のような概念があるのです。

１）　感情（心・気持ち）をもつ人間によるものである
２）　実働（介護の場での実際の働きを示す）
３）　人間関係（関係者の関係性）
４）　質が問われる
５）　日常の人々の関わり合いから社会保障制度までを含有する

さらに、セベヘリ教授は、ヴォード (Vård) は感情を問わないが、オムソーリ (Omsorg) は感情を問うというのです。認知症になっても、脳の感情中枢である扁桃体の機能は衰えないで残るということと関連しているのでしょうか。エスロブ市にある県営の地区診療所

の一般医、イェルトルード・エークレヴさんは、「認知症の人々に大切なのは、治療薬ではなく、むしろ、どのように接するかが重要です」と語りました。これは、医師だけではなく、エスロブ市の高齢者ケアの場に働く誰もがそのように認識していることが、取材をしるのかで、よくわかりました。一人ひとりの認知症の人の尊厳を傷つけない温かなケアが、症状の進行や悪化を防いでいるのです。人間の感情が介在する高齢者ケアはオムソーリ（Omsorg）の概念にあてはまるものなのではないかと思います。

オムソーリのケアの担い手　アンダーナース

エスロブ市の高齢者ケアの場で働くスタッフは495人、うち400人がアンダーナース（underskötersk）、ウスク（usk）と呼ばれるケアスタッフです。基礎的な医療の勉強を修めたケアスタッフです。ケアスタッフとしてはアンダーナースの勉強を修めていない、普通のケアワーカー（vårdbiträdeä）もいます。

エスロブ市はアンダーナースの比率が高く、介護スタッフ全員がアンダーナースであることをめざしています。しかし、ストックホルムなどの都市部の介護現場では、アンダーナースの比率は低くなり、普通のケアワーカーが多くなります。これは、就労の場が多い都市部では、高齢者ケアのスタッフの仕事の社会的地位が高くないこともあり、優秀な人材が集まりにくいからです。

しかし、就労の場が少ない地方都市では、介護現場に優秀な人が集まります。転職も少なく、親子2代アンダーナースという例も多いです。エーデル改革以降、エスロブ市では植林をするがごとくアンダーナースの教育・育成に力を入れてきました。ちなみにエスロブ市では、アンダーナース100%をめざしています。

アンダーナースの職場は、ケア付き住宅である特別な住居をはじめ、ホームヘルプサービス、デイサービスになります。2004年、スウェーデン社会保健省は「ケアの質と技術の開発国家プロジェクト」をスタートさせ、助成金を交付しています。エスロブ市では国に先駆けてアンダーナースの専門化を図っていました。現在では、一般的なホームヘルプ以外に次のようなチームが活躍しています。

① 認知症の人へのホームヘルプサービスを行う認知症チーム。 認知症の専門知識を学んでいます。

② 基礎的な看取りを学んだ一般パリアティブケアチーム。普通のホームヘルプの段階から患者に接し、亡くなる2、3日前から24時間体制で、地区看護師との密な連携で枕元に寄り添いチームで看取りを行っています。看取りに関してはもう一つ、「専門パリアティブケアチームがあります。これは複雑な症状や特別な医療ニーズのある患者の緩和ケアをしており、医師、看護師等の多職種連携で行うパリアティブケアです。

③ 在宅リハビリチーム （理学療法士や作業療法士に同行訪問してリハビリを学び、インストラクターとして働きます。

④　在宅安全アラームチーム。24時間体制で、利用者の救急コールに対応するチームです。

⑤　人材派遣チームは、スタッフの長期休暇・臨時休暇に代理で働くチームです。

エスロブ市で在宅リハビリチームや在宅安全アラームチームを立ち上げた、リハビリ部門の管理主任スタファン・オルソンさんは語りました。

「福祉の世界で前向きに働いていると、もっと質の高い仕事をしたいというミッションが芽生えます。給料の良し悪しではなく、やりがいが接遇の質を高めるのです」

在宅安全アラームは、高齢者が何度ベルを押しても、どのような些細なことでベルを押しても笑顔が優しいアンダーナースが駆けつけるという評判になり、利用者が増えたという事実があります。まさに、アンダーナースの仕事の専門化は、アンダーナースのやりがいにつながり、やりがいが、入念で丁寧な、気づきの対人援助オムソーリのケアに結びついているように思います。

ホームヘルプのアンダーナース、コリンさんに見るオムソーリ

ベテランアンダーナースのカタリーナ・コリンさん（50歳）は言いました。

「ホームヘルプサービスの仕事はやりがいがあります。私の仕事は応用問題を解くように臨機応変に働く仕事です。私はいつも利用者さんの家に入った途端、その日、利用者さんに必要なことを瞬時に頭に浮かべます。利用者さんのニーズは、一人ひとり違います。そして、同じ利用者さんでも、毎日必要なことが違います」

若い時は病院の准看護師だったコリンさんは、ホームヘルプの仕事は看護師の仕事より楽しいと言いました。さらに、利用者さんのニーズを正しく理解するために、利用者さんとの会話を大切にしているそうです。自分だけが一方的に喋るのではなく、キャッチボールのように話をしているそうです。

「私はどんな些細なことからも、話題を広げることができます。そして、これは誰でもできることではないですが、私は手を動かしながら、口も動かせる（喋る）という特技があります」

会話という意味では、筆者がホームヘルプに同行したアンダーナースは誰もが、会話上手でした。コリンさんの立ち居振る舞いはいつも落ち着いていました。コリンさんが別れ際に語った言葉があります。

「大切なことは、いつも心を静かに保つこと」

そういえば、日本のヘルパーさんは作業が手早いことが、プロフェッショナルの証のよ

うに語られることがありますが、ケアは作業ではありません。どのくらい、利用者さんの心の襞に入れるか、という意味では、静かな心はオムソーリのケアのキーワードでした。

平均15分の滞在

エスロブ市のホームヘルプの平均滞在時間は一人15分でした。

短い滞在が可能になったのは、前記のように、ホームヘルプの仕事から時間をくう家事援助（掃除・洗濯・調理）を切り離し、オムソーリのケアに特化したからです。さらにもう一つ、ポイントを絞った介助だけを行うという働き方の徹底も重要です。できないことだけを援助する自立援助です。一方、15分の滞在は「ハードだ」というアンダーナースの発言も気になりました。

そこで、認知症の利用者へのオムソーリケアを具体的な事例を時系列で書きだしてみます。基本的には自立支援のケア

- 玄関のカギを開けて、「グモロン（おはよう）」と明るい声で家の中に入る。
- 薬箱のカギを開け、コップに水をいれ、投薬介助。
- 着替えを済ませていた利用者との会話が途切れなく続く。
- 血流を良くする医療用ストッキングをはかせる。
- キッチンで利用者の女性が朝食のオープンサンドをつくるのを見守りながら、アンダーナースはやかんに湯を沸かし、ティーバックで紅茶をいれる。
- 寝室のベッドメイキング。
- トイレの便器掃除。
- 会話：目覚まし時計を手に、利用者の女性から頼まれていた時間に合わせてあることを目の前で確認した。
- 私たちには約束事があると確認。開けると閉められない窓を開けないように徹底。
- 本日は寒いので、外出の靴を冬用のブーツに変える。
- デイサービスの迎えが9時にあることをしっかり伝えた。
- ゴミをビニール袋に詰め、地域のゴミ捨て場に運ぶ。

私はホームヘルプの同行取材では、家に入った時間と家を出る時間をその都度細かく書きだしておきましたが、たしかに、以上のような内容を15分で、利用者と会話しながら行っていました。

非マニュアル、機転、入念のオムソーリ事例

オムソーリは社会的な通念ですが、同時に、医療というより介護現場の働き方であるということがわかりました。そこで、エスロブ市の介護現場から、スウェーデンが目指したオムソーリを象徴する働き方の事例を紹介します。

10月のクリスマス！　2006年10月、パリアティブケアチームが看取った70代の肺がん末期の患者がいました。私はホームヘルプサービスに同行して、2006年2月と7月に彼女の家

を訪ねました。女性は厳しい方で、夫が亡くなった後は誰とも付き合うこともなく孤独な日々を過ごしていました。家の中に私が入っていいかをアンダーナースに確認してから、彼女に会うことになりました。家に入った途端にきついタバコの臭いを感じるぐらいのヘビースモーカーでした。彼女は犬が大好きで、大きなテリアを飼っていました。

彼女はクリスマスに死にたいという望みをもっていましたが、私が訪ねた7月の時点で、「ヒューヒューと笛のような呼吸をしていました。パリアティブケアチームに2011年にインタビューした時にその女性の消息を尋ねると、彼女がクリスマスまで生きることができないので、10月に彼女の部屋をクリスマス飾りで一杯にしたのと聞きました。孤独な生活をしていた女性でしたが、温かい空気に包まれて人生を終えることができたと聞きました。まさにオムソーリのケアが目指す、非マニュアル、臨機応変であると感激しました。

オムソーリのケアは入念・丁寧をめざしています。私は認知症コーディネーターのレーナ・ルンデルさん（50歳）の働きぶりにもオムソーリのケアをみました。

ルンデルさんは、「孤立した家族」と言われていた老夫婦と50代の娘が暮らす2万坪の丘陵に建つ家に60回も訪ね、訪問にこぎ着けたと聞きました。一家は親戚はおろか、近所との交流をしない孤立した日々を重ねていました。彼らは花卉栽培で財をなしましたが、この10年余り当主が脳卒中になってから社会的な孤立が続いているとのことでした。老妻が認知症らしいという情報が入り、ケアマネジャーが訪問しましたが、拒否をされ、その後は認知症コーディネーターのレーナさんが引き継いだのでした。公的なケアが入るまで1年かかったケースです。レーナさんはアンダーナースになった後、2002年にイェンシェーピン大学で認知症の専門教育を受けています。2009年から、現職の認知症コーディネータを務め、公的サービスを拒否する人をサービスにつなげたり、家族や本人の相談にのっています。

オムソーリのケアはマニュアル通りの働き方では実現できず、有償で働きながらも、仕事の中に無償性がないと実現しない働き方です。前記のスタファン・オルソンさんが語るようにミッションに裏打ちされた働き方ができると、決まり切ったルーチンワークを超えたケアができるのだと思いました。それはケアを受ける高齢者や認知症の人を援助して、症状の悪化を食い止めることができるのです。同時に働く本人も仕事の満足をえることができるのです。

まとめ　オムソーリのケアとは

オムソーリ（Omsorg）という言葉が、1982年の社会サービス法５条に登場してから35年という歳月が過ぎていきました。 教科書のページをはじめ、看板や行政の書類に登場して、Omsorg は人々に当たり前の言葉になっています。しかし、オムソーリのケアそのものは、地方都市エスロブ市の介護現場で息づいていました。認知症の重症化が進んでいないことは、国のデーターで明らかです。また、私が実際に自分の目でくまなく見聞した現場でもOmsorgは存在していました。

日本も近未来に向けて、認知症の症状を悪化させないケアメソッドの開発と介護スタッフの社会的地位向上の必要を早急に取りかかる必要があると実感しています。オムソーリは、日本にとって有益な概念であり、その歴史的考察は極めて今日的な課題であると痛感しています。

（編集部注：本稿は、藤原氏が新たに寄稿した原稿に編集を加えたものです。）